



第2図 鴨沂高校内調査地配置図

御土居の西側、鴨川西畔の鞍馬口から六条までの間に移転させたものです。史料では、100 寺以上の寺院が寺町に配置されています。

今回の調査地は、「京都図屏風」(1621 年成立)では会念寺や常念寺が、「洛中絵図」(1637 年)では草堂や専念寺が記されています。宝永 5 (1708) 年に禁裏やその他の御所、京都の大半を焼く大火があり、鴨沂高校周辺も広く火災にありました。この時、寺町にあった寺院は鴨川の東などに移築されています。以後、この地には武家屋敷が建ち並び、その後再び天明 8 (1788) 年の大火で周辺は焼失しています。

今回の調査では、近現代の盛土 1・2 の下から焼土・炭を含む整地層を確認しました。出土遺物より、北地区の整地層は宝永 5 年の大火後の整地に伴うことが分かりました。さらにその下層で、天正の寺町整備に伴う整地層を検出しました。南地区では宝永の整地層のさらに上で天明 8 年の大火後の整地層を確認しました。

北地区では、宝永の整地層から掘り込まれた柱穴を検出しました。寺町期の整地層上面では、

幅約 1.5m、深さ約 0.7m の南北方向の溝 S D 28 や土坑 S X 04 を検出しました。溝は寺町の寺院に伴うと考えられますが、性格は不明です。土坑 S X 04 には多量の焼けた瓦が投棄されており、宝永 5 年の火災で焼亡した建物の廃材をかたづけられた穴と考えられます。宝永の整地はこの直後に行われたとみられます。

南地区では北地区と同じく、宝永 5 年の火災に伴う整地層から掘り込まれた柱穴や溝を検出し、寺町期の整地層上面では南北 2 間、東西 4 間以上の礎石建物跡、寺町期の寺院に伴う多量の焼けた瓦を廃棄した土坑 S X 26 を検出しました。前者は宝永 5 年大火後の武家屋敷もしくは公家屋敷に伴う遺構、後者は寺町に伴う寺院の遺構である可能性が高いものと考えられます。

3. まとめ

今回の調査では、法成寺跡、寺町旧域でそれぞれ重要な調査成果を得ることができました。

法成寺が創建された時点では、調査地周辺は鴨川の河川敷に位置しており、寺域がここまで及んでいなかったと考えられます。法成寺の主要な部分は荒神口通以北にあったと推定されます。

寺町旧域については、秀吉が寺院の再編を行いました。個別の寺院の実態についてはよく分かっていませんでした。今回の調査では、寺院に関する礎石建物や溝などの遺構を検出しました。絵図などに残された寺院との関係も含め、今後、中世末期から近世の京の実態に迫り得る成果と言えるでしょう。

この後、何度かの大火を経て、寺町は武家屋敷や公家屋敷へと変わりました。明治 33 (1900) 年に京都府高等女学校が現校地に移転し、昭和 23 (1948) 年には京都府立鴨沂高等学校と改称され現在に至っています。

このように、当調査地では平安時代からの様々な歴史的事象が埋もれていることが判明しました。